

コミュニケーションのための 日本語学習用辞書の構想

野田尚史

◆要旨

日本語を母語としない人たちが必要としている日本語の辞書は、「聞く」「話す」「読む」「書く」ために直接、役に立つものである。たとえば次のような辞書である。

- (1) 「聞く」ための辞書では、聞き間違えていても調べたい語句が調べられる。
- (2) 「話す」ための辞書では、個々の状況に合ったあいづちなどの音声聞ける。
- (3) 「読む」ための辞書では、固有名詞を含め、あらゆる語句の意味が示される。
- (4) 「書く」ための辞書では、依頼や感謝などのメールに使う文章例が示される。

このような辞書を作るためには、日本語学の枠組みではなく、非母語話者が辞書を使う状況を考えた日本語研究が必要である。

◆キーワード

聞く、話す、読む、書く、多言語

◆ABSTRACT

A Japanese language dictionary that is needed by people who are non-native speakers of Japanese is one which is useful for “listening,” “speaking,” “reading” and “writing.” For example, it should be a dictionary like the following:

1. A dictionary for “listening” should enable one to search for words and phrases even if one hears them incorrectly.
2. A dictionary for “speaking” should enable one to hear sounds such as *aizuchi* backchanneling which are appropriate in specific situations.
3. A dictionary for “reading” should list the meanings of various words and phrases, including proper nouns.
4. A dictionary for “writing” should list sample sentences that can be used in emails with requests or expressions of gratitude.

In order to make a dictionary such as the above, we need to rely on Japanese language research which takes into consideration the situations in which non-native speakers use dictionaries, rather than relying on the framework of Japanese linguistics.

◆KEY WORDS

listening, speaking, reading, writing, multilingual

A Framework for a Japanese Language Learning Dictionary for Communication

HISASHI NODA

1 この論文の主張

この論文の目的は、日本語を母語としない人たちが「聞く」「話す」「読む」「書く」というコミュニケーション活動をするのに役立つ辞書を作るにはどのようにすればよいかという構想を述べることである。

コミュニケーションのための日本語学習用辞書を作るには、日本語学の枠組みから出発するのではなく、非母語話者が「聞く」「話す」「読む」「書く」というコミュニケーション活動で、何のために辞書を使い、どんな情報を知りたいかという実際の状況から出発しなければならないことを主張する。

この論文の構成は、次のとおりである。最初に、次の2.でこれまでの日本語学習用辞書を振り返り、3.でコミュニケーションのための日本語学習用辞書の基本的な方針を提案する。そのあと、4.から7.では、「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれのための辞書をどのようなものにすればよいかを説明する。最後の8.では、そのような辞書を作るにはどんな研究が必要かについて述べる。

2 これまでの日本語学習用辞書

日本語学習用辞書としては、すでに『基礎日本語学習辞典』や『日本語を学ぶ人の辞典』をはじめ、さまざまな工夫が盛り込まれた辞書が作られている。

また、日本語学習用辞書をどのようにしたらよいかについても、玉村 (1995)、砂川 (1998)、井上・有賀 (2006) など、多くの論考がある。

しかし、これまでに作られた辞書には、次の (1) と (2) のような問題点があると考えられる。これらの問題点は、これまであまり指摘されてこなかった。

- (1) 非母語話者が辞書を使う実際の状況を意識した作りになっていない。
- (2) 日本語学の枠組みに従って辞書が作られている。

このうち (1) は、たとえば、話したり書いたりするための「発信型」の辞書なのに、見出し語が日本語になっているため、その見出し語にたどり着くのが

が難しいというようなことである。

一方、(2) は、たとえば、どんな語と結びつきやすいかというコロケーション情報は、日本語学で行われているのと同じように、動詞がどんな名詞と結びつきやすいかが中心で、名詞がどんな動詞と結びつきやすいかはあまり示されていないというようなことである。

3 コミュニケーションのための日本語学習用辞書の方針

非母語話者のコミュニケーション活動に役立つ辞書を作るには、次の (3) から (5) のような方針で辞書を作ることを提案する。

- (3) 「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれのための辞書を分ける。
- (4) 非母語話者が辞書を使う状況をもとにして辞書を作る。
- (5) 分量に制限がないインターネットで辞書を提供する。

このうち1つめの (3) は、野田 (編) (2005) などでも指摘されているように「聞く」「話す」「読む」「書く」というコミュニケーション活動はそれぞれ大きく違うため、それぞれの活動に役立つ辞書を分けて作るということである。

2つめの (4) は、日本語学の枠組みをもとにするのではなく、非母語話者がどんなときにどんな情報を知りたいかを考えて辞書を作るということである。

3つめの (5) は、紙の辞書では分量に制限があり、音声や動画も扱えないので、そうした制限がないインターネットで辞書を提供するということである。

このあとの4.から7.では、「聞く」「話す」「読む」「書く」の順で、それぞれのコミュニケーション活動に役立つ辞書について説明する。

4 「聞く」ための日本語学習用辞書の構想

4.1 「聞く」ための辞書の基本的な構造

「聞く」ための日本語学習用辞書は、日本語で話された音声を聞いて、その意

味を読みとる「聞く」コミュニケーション活動に役立つものにする必要がある。

辞書の使用者が日本語を聞くときに調べたいのは、「ジュケーショニーイマシタ」（重軽傷を負いました）や「シバイタロカ」（関西方言で「たたくぞ」）などの音声だろう。そして、知りたいのは、基本的にはその意味である。意味は、辞書使用者の母語や得意な言語で示されるのがいちばんわかりやすい。

そうすると、「聞く」ための日本語学習用辞書は、音声そのものや、さまざまな文字による音声表記を入力すると、その意味がいろいろな言語で示される形が基本になる。その音声の日本語表記は意味理解の助けになることがあるので示したほうがよいが、その語句の文法的な情報などは基本的には不要である。

辞書の使用者が日本語を聞くときに何のために辞書を使うのかを考えると、「聞く」ための辞書は、次の（6）から（9）のようなものにする必要がある。

- （6） 音声を入力する方法：音声そのものの入力にも対応でき、さまざまな文字による日本語音声表記の入力にも対応できる。
- （7） 調べられる語句の形：音声が正確に聞きとれていない場合や、語句の区切り方がわからない場合でも調べられる。
- （8） 調べられる語句の種類：話しことばに特有の表現や、略語、俗語など、あらゆる語句が調べられる。
- （9） 示される語句の意味：それぞれの語句が日本語の発話の中で使われるときの評価的な意味や背景情報も示される。

この（6）から（9）については、それぞれこのあとの4.2から4.5で、具体例をあげて詳しく説明する。

4.2 「聞く」ための辞書で音声を入力する方法

「聞く」ための辞書を使うのは、意味がわからない日本語の音声を聞いたときである。その音声を辞書で調べるときの入力方法は2つ考えられる。1つは、その音声を音声として入力する方法である。もう1つは、その音声を文字に変えて入力する方法である。

このうち、聞いた音声を入力する方法では、音声がきれいに録音されてい

ば、その音声そのまま使える。録音されていない場合は、辞書の使用者が、聞いた音声をまねてマイクで入力する。入力された音声は音声認識技術によって分析され、その音声に対応する日本語の語句とその意味の候補が示される。

そのとき、その音声や音声表記に対応する語句候補の標準的な音声も聞けるようにしておいたほうがよい。自分が聞いた音声とその候補の音声を照合できないと、候補の中から自分が聞いた音声を絞り込むのが難しいからである。

一方、聞いた音声を文字に変えて入力する方法では、さまざまな文字での日本語音声表記に対応できるようにしておく必要がある。

ひらがなでの入力では、「おおきく」でも「おうきく」でも「おーきく」でも、「大きく」が調べられるようにしておく。カタカナの入力では、「オオキク」でも「オウキク」でも「オーキク」でも調べられるようにしておく。

ローマ字では、「okiku」や「ookiku」など、ヘボン式や訓令式をベースにした表記だけでなく、さまざまな言語の表記をベースにした日本語のローマ字表記でも調べられるほうがよい。たとえばスペイン語の表記をベースにしたローマ字表記では、「oquicu」から「大きく」が調べられるということである。

さらに、ハングルや中国語の漢字など、さまざまな文字での日本語音声表記にも対応しているほうが便利である。日本語の音声に近い韓国語や中国語の音声をハングルや中国語の漢字で表したものである。日本語に近い音で代用するので複数の表記が考えられたり、同じ音声に複数の漢字が対応していたりすることがある。考えられるすべての表記に対応していれば、使い勝手がよい。

4.3 「聞く」ための辞書で調べられる語句の形

非母語話者が「聞く」ための辞書を使うとき、音声は正確に聞きとれていなかったり、語句の区切り方がわかっていなかったりする場合が多い。そのような場合に対応するため、次の（10）と（11）のような工夫が必要になる。

- （10） 不正確な音声や音声表記からでも、調べたい語句が調べられる。
- （11） 語句の区切り方がわからなくても、調べたい語句が調べられる。

このうち（10）は、たとえば「ジケン」という音声や音声表記を入力すると、

「事件」だけでなく「実験」や「人権」もその語句の候補として示されるといふことである。

聞き間違いが起きやすいのは、たとえば次の(12)から(16)のような場合である。このような間違いやすい音声は、体系的に登録しておくのがよいだろう。

- (12) 長音の脱落：たとえば「ドブツ」から「動物」が調べられる。
- (13) 促音の脱落：たとえば「マカ」から「真っ赤」が調べられる。
- (14) 有声音と無声音の混同：たとえば「イト」から「井戸」が調べられる。
- (15) 類似音の混同：たとえば「コンラン」から「懇談」が調べられる。
- (16) 無声母音の脱落：たとえば「michksa」から「道草」が調べられる。

また、実際に聞き間違いをしやすい音声について大規模な調査を行い、それを個別に登録しておくことも必要である。たとえば、「お願いします」のぞんざいな発音が「お礼します」に聞こえることがあれば、「オレーシマス」から「お願いします」が調べられるようにしておく。また、たとえば、「オサキネス」から「お先です」が調べられるようにしておく。

なお、聞き間違いやすい音声は、辞書使用者の母語によっても違ってくる。自分の母語を設定すると、その母語で聞き間違いやすい語句の候補が優先的に出てくるようになっていけば、さらに親切である。

一方、前の(11)の「語句の区切り方がわからなくても、調べたい語句が調べられる」というのは、具体的には、次の(17)と(18)のようなことである。

- (17) 長い単位で調べても、適切な情報が得られる。
- (18) 短い単位で調べても、適切な情報が得られる。

1つめの(17)は、たとえば、「しらけちゃって」のような形がそのままの長い単位でも調べられるということである。これを「しらける」や「ちゃう」などに分解できなくても、調べられるようにするためである。

「エンヤスケイコウ」(円安傾向)や「マジヤベ」(本当にやばい)なども、そのままの形で調べても、その意味が示されるようにしておきたい。

2つめの(18)は、たとえば、「ナンテ」のような短い単位で調べても、「何てった」(何と言った)や「何てったって」(何と言っても)のような長い単位が、調べたい語句の候補として示され、その意味が示されるということである。

なお、「そのままの形で調べられる」点については、井上・有賀(2006)が詳しい。

4.4 「聞く」ための辞書で調べられる語句の種類

「聞く」ための辞書では、話された日本語に出てくるあらゆる語句をさまざまな形で調べられるようにしておく必要がある。どんな語句を辞書に載せるかを検討する必要はない。固有名詞を含め、どんな語句も載せるべきである。

これまでの辞書にはあまり載っていないもので、特に重要なのは、次の(19)から(23)のような話しことばに特有の語句である。

- (19) 縮約形など：「イキャ」(行けば)、「オレンチ」(おれの家)など
- (20) 略語：「チューキン」(駐車禁止)、「マルキュー」(「109」というファッションビル)など
- (21) 俗語：「イチキュッパ」(1980円、19800円など)、「ジミチ」(高速道路ではない一般道)など
- (22) 方言：「シュットシタ」(関西方言で「すっきりしていて、スマートで、かっこいい」)、「ミラン」(九州方言で「見ない」)など
- (23) ぞんざいな発音：「チョ」(ちょっと)、「シジツ」(手術)など

話しことばに特有ではないが、次の(24)のような複合語も、音声を聞いただけではどこで切れるのかわからないので、そのままの形で調べられるとよい。

- (24) 複合語：「コーインショー」(好印象)、「サイジューヨーカダイ」(最重要課題)など

さらに、話すときの身ぶりも調べられるようになっていると便利である。辞書使用者の母語や得意な言語で、たとえば「小指」という語を入力すると、小指を使った身ぶりの画像とともに、その意味が示されるといった形である。

4.5 「聞く」ための辞書で示される語句の意味

「聞く」ための辞書では、調べるために入力した音声や音声表記に対して、聞き間違えている可能性がある語句など、たくさんの候補が示される。その中から目的の語句を早く適切に選べるようにしておかなければならない。

そのための方法として重要なのは、その語句が使われた状況を条件にして絞り込めるようにしておくことである。たとえば、「テレビのニュース」「大学生どうしの雑談」「会社の会議」「コンビニの店員の発話」などで絞り込めるようにしておく。「テレビのニュース」でも、「経済ニュース」「スポーツニュース」などにさらに絞り込めるとよい。

また、話し手の属性を条件にして絞り込めると便利なこともある。「関西方言」「九州方言」などで絞り込んだり、「老人」「幼児」などで絞り込んだりするということがある。

ただ、方言などで絞り込む場合、その方言独特の語句だけを候補として出すのではなく、その方言で使われる可能性があるすべての語句を候補として出す必要がある。「ケッタ」を「東海方言」で絞り込んだ場合、自転車の意味の「ケッタ」だけでなく、「蹴った」も候補として出す必要がある。

そのほか、調べたい語句の品詞や品詞の下位類が予想できる場合のために、「名詞」や「人名」といった条件で絞り込めるようにしておくのもよい。

「聞く」ための辞書では、調べた語句の意味が辞書使用者の母語や得意な言語で示される。その表示については、次の(25)から(28)のようなことを考慮する必要がある。

- (25) 「聞く」ために必要がない文法的な情報は載せない。
- (26) 語句の意味の範囲がはっきりわかるようにする。
- (27) 語句の評価的な意味がわかるようにする。
- (28) 語句の背景情報がわかるようにする。

1つめの(25)は、たとえば、「知ってる」の情報として、否定形は「知ってない」ではなく「知らない」になるという「聞く」ために必要がない文法的

な情報は載せないということである。「～と申します」は他人の名前でなく、自分の名前を言っているのだといった「聞く」ために必要な文法情報は載せる。

2つめの(26)は、たとえば、「涼しい」の意味を英語で「cool」と示すだけでは「かっこいい」の意味もあると思われる可能性があるため、そのような意味がないことを明示しておくということである。

3つめの(27)は、たとえば、「いい人(だ)」は高い評価に使うのが普通だが、「人がいい」は「そのために損をしている」といった低い評価をとまなうのが普通であることを明示しておくということである。

4つめの(28)は、次のようなことである。たとえば「山口百恵」の情報として、歌手であることや、活躍した時期、代表曲などが示されていても、役に立たないことが多い。「絶頂期に若くして結婚・引退し、その後は芸能活動をまったくしていない」といった情報を示しておくことが必要である。「山口百恵」は、そのような背景情報を前提に話され、それを知らないによく理解できないことがあるからである。

これら(25)から(28)のほか、実質語である名詞や動詞、形容詞ではないもの、つまり、フィルターやあいづち、感動詞、接続詞、文末表現などについては、次の(29)のような情報が必要である。

- (29) 実質語以外については、それが文章の中で果たす機能が示される。

たとえば、文頭にある「つまり」は、その後に言いたいことが来やすいとか、文末にある「かも」は自分の主張を押しつけないようにするためのものであるということである。「やっぱり」や文頭の「てか(というか)」は、ほとんど意味がなく、口癖になっているだけの話者もいるといった情報も必要である。

5 「話す」ための日本語学習用辞書の構想

5.1 「話す」ための辞書の基本的な構造

「話す」ための日本語学習用辞書は、話したい内容を適切な日本語の音声に

する「話す」コミュニケーション活動に役立つものにする必要がある。

辞書の使用者が日本語を話すときに知りたいのは、バスの停留所のことを日本語で何と言うか、会社の大事な取引先に大きな迷惑をかけて謝るときに日本語でどのように言うのがよいかといったことである。

そうすると、「話す」ための日本語学習用辞書は、調べたい語句や話す「状況」を自分の母語や得意な言語で入力すると、それに対応する日本語の音声聞ける形が基本になる。その音声の日本語の表記も、その音声の内容を確認したり、その音声を覚えたりする助けになることがあるので示したほうがよい。

辞書の使用者が日本語を話すときに何のために辞書を使うのかを考えると、「話す」ための辞書は、次の(30)から(33)のようなものにする必要がある。

- (30) 入力できる語句：さまざまな言語で語句や話すときの「状況」を入力すると、それに対応する日本語の音声が表示される。
- (31) 示される意味的・文法的な情報：類義語との違いや、その語句がどんな語句と結びつきやすいかというコロケーション情報が示される。
- (32) 示される文体的・社会的な情報：どんな状況でどんな相手だったらどんな表現を使うのがよいかといった情報が示される。
- (33) 示される音声：複合語や固有名詞、方言などを含め、その語句の音声が表示される。

この(30)から(33)については、それぞれこのあとの5.2から5.5で、具体例をあげて詳しく説明する。

5.2 「話す」ための辞書で入力できる語句

「話す」ための辞書では、自分の母語や得意な言語で「暑い」や「話は変わるけど」のような語句を入力すると、それに対応する日本語が表示されるのは当然である。

「そう、そう」のようなあいづちは、英語で入力する場合を例にすると、「exactly」のような対応する語で入力しても、「agree」や「agreement」のような機能を表す語で入力しても、その使い方の説明とともに出てくるようにしておくとうい。

ただ、個々の語句を調べて自分で文を作るのでは、自然な日本語にならないことが多い。どんな状況で何を話したいかを入力すると、その状況にふさわしい日本語が表示されるようになっていて役に立つ。

たとえば、同じ会合に出席した初対面の人と帰りの電車で最後に二人きりになったときにどうい話をすればよいかを知りたいとき、自分の母語や得意な言語で「初対面 帰路 電車」のような語句を入力すると、「お宅はどちらですか」のような発話の候補がその意味とともに出てくるという形である。

また、居酒屋で最初に出てくる「お通し(突き出し)」のように、自分の母語や得意な言語にちょうど対応する語句がなく、調べにくい場合がある。特にそのような語句については、「前菜」や「最初 料理」などを入力すると、そこから連想される語句がその意味とともに出てくると便利である。

5.3 「話す」ための辞書で示される意味的・文法的な情報

「話す」ための辞書では、調べたい語句や話す「状況」を自分の母語や得意な言語で入力すると、それに対応する日本語の音声聞ける。そのとき、音声聞けるだけでなく、その語句の意味的な情報や文法的な情報も示される必要がある。たとえば次の(34)から(37)のようなものである。

- (34) 語句の対応関係：母語などで入力した語句とそれに対応する日本語の関係が複雑なときでも、その対応関係がわかりやすく示される。
- (35) 類義語句との違い：意味が似ている類義語句との使い方の違いが示される。
- (36) 活用：動詞や形容詞の活用のしかたのほか、直接受身になるか、「～ている」の形になるかといった情報が示される。
- (37) コロケーション：どんな語句と結びついて使われるかというコロケーション情報が示される。

1つめの(34)は、語句の対応関係についての情報である。たとえば、英語で「hot」と入力した場合、「暑い」という意味の説明や「辛い」という意味の説明などが英語で示され、それぞれに対応する日本語の語句が選びやすくなっ

ているということである。

2つめの(35)は、類義語句との違いについての情報である。自分の母語や得意な言語で入力した語句に対応する日本語を複数示す場合は、必ず意味や用法の違いを示すべきである。それがわずかな違いでも、示すべきである。違いがわからないと、辞書の使用者はどれを使えばよいかわからないからである。たとえば、「急に」と「いきなり」であれば、「いきなり」のほうが迷惑を感じる時に使うといった説明とともに、例文を示すということである。

3つめの(36)は、動詞や形容詞の活用にかかわる情報である。たとえば英語で「boil」と入力して、それに対応する日本語の一つとして「煮る」が示された場合、過去を表す「た」の形は「煮た」であり、仮定条件を表す「たら」の形は「煮たら」とあるといった情報が示されるということである。動詞の活用のタイプがIIグループ(一段動詞、弱変化動詞)であるといった情報だけでなく、よく使う活用形はすべて示されるほうが親切である。

「live」に対応する日本語は、「住む」ではなく、「住んでいる」を基本として示すといった配慮も必要である。そのとき、「住みたい」のような「住む」の派生形についても、「住んでいたい」との違いを含め、説明があるとよい。

『日本語基本動詞用法辞典』をはじめ、多くの日本語学習用辞書では、活用のしかただけでなく、活用にかかわるさまざまな情報が掲載されているが、言語学的な判断による情報を一律に載せるのがよいとは限らない。

たとえば、「煮る」は言語学的には間接受身になる動詞だとしてよいだろう。「勉強しているそばでおでんを煮られると、集中できない」といった文が考えられるからである。しかし、実際にこのような間接受身が使われることはないといってよい。学習用辞書には「間接受身になる」と示す必要はないだろう。

4つめの(37)は、どんな語句と結びつきやすいかというコロケーション情報である。姫野(2006)に詳しい説明があるが、『研究社日本語表現活用辞典』をはじめ、多くの日本語学習用辞書では、動詞を中心にどんな語句と結びつきやすいかという情報が載っている。しかし、名詞についてどんな語句と結びつきやすいかという情報はあまり載っていない。

実際には、名詞から、その名詞と結びつきやすい動詞がわかると便利である。たとえば「play tennis」を日本語で何と言うかを調べたいとき、動詞の「play

からでは「テニスをする」は見つけにくい。「play」に対応する日本語がたくさんあり、「play」と結びつく名詞も多いからである。名詞の「tennis」から調べられるようになっていけば、「テニスをする」が見つけやすくなる。「tennis」に対応する名詞も「tennis」に結びつく動詞も少ないからである。

もちろん、可能な限り、「play tennis」のような連語を入力しても、それに対応する日本語が示されるようにしておいたほうがよい。

なお、井上・有賀(2006)でも触れられているように、学習用辞書では、活用情報やコロケーション情報を中心に、このような言い方はしないということもわかるようにしておくべきである。「参考する」とは言わないというように、非母語話者が間違えやすい表現を示すと親切である。

5.4 「話す」ための辞書で示される文体的・社会的な情報

前の5.3でみた意味的な情報や文法的な情報は、これまでの学習用辞書でもかなり示されていた。それ以外に、これまであまり示されていなかった文体的な情報や社会的な情報も必要である。

このうち、文体的な情報というのは、次の(38)のようなものである。

(38) 文体：話しことばの中でも、どんな文体で使われ、どんな文体で使われないかという情報が示される。

「話す」ための辞書では、書きことばでしか使われないような語句は示す必要がない。話しことばで使われる語句を示すだけよい。ただ、話しことばでも、非常にくだけた文体から非常にかたい文体まであり、文体による使い分けがある語句も多い。その使い分けを示す必要がある。

たとえば「various」を入力したとき、対応する日本語として示すのは、「話す」ための辞書では「いろんな」が基本になる。学会発表のようなかたい文体の話しことばでは「いろいろな」が使われるということも示すとよい。

一方、社会的な情報というのは、どんな状況でどんな相手だったらどんな表現を使うのがよいかという情報である。たとえば次の(39)から(42)のようなものである。

- (39) 日本語ではあまり使わない表現：同じ状況でも、ある言語ではよく使うが、日本語ではあまり使わない表現は、そのことを明示しておく。
- (40) 日本語でよく使う表現：同じ状況でも、ある言語ではあまり使わないが、日本語ではよく使う表現は、その表現を明示しておく。
- (41) 使う相手に制限がある表現：ある日本語の表現が相手によって、使えたり使いにくかったりする場合は、そのことを明示しておく。
- (42) 使うのに注意が必要な表現：その表現を使うと、場合によっては失礼になるようなものは、そのことを明示しておく。

1つめの(39)は、「お元気ですか」のような表現である。いろいろな言語で、人に会ったときのあいさつ表現として「お元気ですか」や「(ご機嫌)いかがですか」のような表現が使われる。そのような表現に対して、それをそのまま翻訳した日本語を示すのでは、自然な表現を知りたい辞書使用者には有益とはいえない。そのような表現はあまり使わないことを明示しておくのがよい。

それと同時に、そのような状況でどんな表現がよく使われるかという情報を示すべきである。たとえば、「暑いですねえ」のような気温・天気についての表現、「この前はどうも」のような過去のことについて感謝を表す表現などである。同年代や年下の親しい人に対しては「元気？」のような表現が使えることも示しておくといよい。

2つめの(40)は、「よろしくお願いします」のような表現である。依頼を行ったときだけでなく、自己紹介などのときも、発話の最後にこのような表現を使うことを示しておくべきである。このような表現を使わない言語の人でもこのような表現の存在を知ることができるように、「依頼」や「自己紹介」という状況を入力したときに、このような表現が示されるようにしておくといよい。

3つめの(41)は、「いい質問です」のような表現である。講演などの質疑応答で、質問を受けた講演者が最初にこのような表現を使うことがある言語がある。日本語でも、「いい質問ですね」なら使える。しかし、研究発表で、明らかに年上の研究者から質問を受けた大学院生が相手に対する評価を表すこのような表現を使うと、「偉そうだ」と思われる可能性がある。そのような情報も示したい。

4つめの(42)は、「太りましたか？」のような表現である。このような表現をあまり失礼だとは思わない言語もあるだろう。しかし、日本語では、特に親しい人から言われた場合は別として、あまり好まれない傾向がある。そのような注意が必要だという説明とともに、「お元気そうですね」のような代替表現の候補を示しておくといよい。

5.5 「話す」ための辞書で示される音声

「話す」ための辞書では、日本語の音声を示すことが重要である。音声を示すときには、たとえば次の(43)から(46)のような工夫があるとよい。

- (43) 固有名詞の音声も示す。
- (44) 語を越える大きな単位の音声も示す。
- (45) 方言を含め、さまざまな話者の音声を示す。
- (46) 音声を示すだけでなく、その音声をさまざまな文字で表記する。

1つめの(43)は、「金原」(カネハラ、キンバラ、キンバラ)や「キャノン」(キャノン)、「草薙剛」(クサナギツヨシ)のような固有名詞の音声も聞けるようにするということである。複数の読み方がある姓や名は、頻度が多い順に示したり、地域や年代による傾向を説明したりする必要がある。

2つめの(44)は、「勉強机」のような複合語や、「それ、いいですね」のような、語より大きな単位の音声も聞けるようにするということである。

3つめの(45)は、どの語句についても、男女や年齢、方言などが違う、なるべく多くの人の音声が聞けるということである。どの音声もはっきり発音しすぎずアナウンサーの音声ではなく、一般の人の自然な音声をを使うのがよい。非母語話者がそれをまねて発音すると自然に聞こえる音声がよいからである。

4つめの(46)は、音声が聞けるだけでなく、その音声の漢字かな交じり表記、ひらがな表記、ローマ字表記のほか、ハングル表記、中国語の漢字による日本語音声表記など、さまざまな文字での日本語音声表記も示すということである。どの場合も、アクセントやイントネーションの表記も必要である。

6 「読む」ための日本語学習用辞書の構想

6.1 「読む」ための辞書の基本的な構造

「読む」ための日本語学習用辞書は、日本語の文字で書かれた文章などを見て、その意味を読みとる「読む」コミュニケーション活動に役立つものにする必要がある。

辞書の使用者が日本語を読むときに調べたいのは、「我慢して」や「NHK」など、漢字やアルファベットを含む日本語の文字列だろう。そのような文字列を調べて知りたいのは、基本的にはその文字列の意味である。意味は、辞書使用者の母語や得意な言語で示されるのがいちばんわかりやすい。

そうすると、「読む」ための日本語学習用辞書は、日本語の文字列を入力すると、その意味がいろいろな言語で示される形が基本になる。その文字列の発音についての情報は基本的には不要である。特別な操作をすれば見られるようにしておくのはよいが、最初から示す必要はない。

辞書の使用者が日本語を読むときに何のために辞書を使うのかを考えると、「読む」ための辞書は、次の(47)から(50)のようなものにする必要がある。

- (47) 文字を入力する方法：電子的な文字の入力や貼り付けに対応するだけでなく、手書き文字も認識できる。
- (48) 調べられる語句の単位：動詞などのさまざまな活用形が調べられるほか、語句の区切り方がわからなくても調べられる。
- (49) 調べられる語句の種類：固有名詞、複合語、専門用語など、あらゆる語句が調べられ、顔文字など、あらゆる文字も調べられる。
- (50) 示される語句の意味：それぞれの語句が日本語の文章の中で使われるときの評価的な意味や背景情報も示される。

この(47)から(50)については、それぞれこのあとの6.2から6.5で、具体例をあげて詳しく説明する。

6.2 「読む」ための辞書で文字を入力する方法

「読む」ための辞書を使うのは、実際に何かを読んでいるときである。その読んでいるものには、大きく分けて2種類のものがある。

1つは、インターネット上の文章や電子メールなどである。そのような電子化されたものの中に出てきた語句を調べるときは、その文字をコピーして辞書の入力欄に貼り付ければ済むので、特に問題はない。

もう1つは、紙に印刷された文章や手書きの文章など、電子化されていないものである。そのような電子化されていないものの中に出てきた語句を調べるときは、その文字の入力方法にさまざまな工夫が必要である。特に、読み方がわからない漢字の入力は簡単ではないからである。

漢字の入力は、読み方がわかっているならば、かな漢字変換によって簡単に入力できる。読み方がわからないときは、部首や総画数で調べる方法もあるが、手間がかかる。手書き入力を使うのがいちばん簡単である。これらは普通のパソコンで対応できるが、さらに次の(S1)と(S2)のような工夫も必要になる。

- (S1) 中国語の漢字をもとにした入力：調べたい漢字と似ている中国語の漢字を入力すると、日本語の漢字の候補が示され、そこから選べる。
- (S2) 韓国語の漢字をもとにした入力：調べたい漢字の韓国語での読み方を入力すると、日本語の漢字の候補が示され、そこから選べる。

1つめの(S1)は、中国語の漢字を知っている人のための次のような入力方法である。中国語入力システムで、調べたい漢字と似ている中国語の漢字を入力すると、それと似ている日本語の漢字の候補や、その漢字を含む語句の候補が示される。辞書の使用者は、その中から調べたい漢字や語句を選べばよい。

2つめの(S2)は、韓国語話者で漢字を知っている人のための入力方法である。韓国語入力システムを使って、調べたい漢字の韓国語の読み方をハングルで入力すると、それに対応する日本語の漢字の候補や、その漢字を含む語句の候補が示される。辞書の使用者は、その中から調べたい漢字や語句を選べばよい。

そのほか、パソコンでは扱えない手書き特有の「門」や「第」などの略字も、

手書き入力などをすると、そのままの形で示され、その略字を含む語句も調べられるようにしておくが親切である。

6.3 「読む」ための辞書で調べられる語句の単位

非母語話者が「読む」ための辞書で意味がわからない語句を調べるとき、どこで区切って調べればよいかかわからないことがある。そのような場合でも適切に調べられるようにしておく必要がある。具体的には、次の(53)から(55)のような工夫である。

(53) 動詞などのさまざまな活用形が調べられる。

(54) 長い単位で調べても、適切な情報が得られる。

(55) 短い単位で調べても、適切な情報が得られる。

1つめの(53)は、たとえば「たたんだら」を調べたいときに、「たたむ」という辞書形がわからなくても調べられるようにしておくということである。「たたんだら」で調べると、「たたむ」の意味だけでなく、「たたんだら」全体の意味も示されるようにしておくとうい。

2つめの(54)は、「それはそうとして」や「それについては」のような長い単位で調べても、その意味がわかるということである。「それはそうとして」のように「それ」「は」「そう」「として」の意味を組み合わせても全体の意味がわからないものだけでなく、「それについては」のように「それ」「について」「は」の意味を組み合わせれば全体の意味がわかるものも調べられると便利である。

これには、「8割超」という語句を「割超」で調べても、「割」と「超」に分かれることがわかり、その意味が示されるといったことも含まれる。

3つめの(55)は、「お手数をおかけして」という語句を「手数」のような短い単位で調べても、「お手数をおかけして」のような長い単位が、調べたい語句の候補として示され、その意味がわかるようにしておくということである。

これには、「四畳半」という語句を「畳」という短い単位で調べても、「四畳半」のような長い単位が示され、その意味がわかるということも含まれる。

そのほか、次の(56)のような工夫も必要だろう。

(56) 間違った語句でも調べられる。

これは、スキャナによる文字の読み取りや手書き入力で間違った文字になったときでも、正しい文字の候補が示され、その意味がわかるようにしておくということである。たとえば、「三味」には「三味」という候補が示され、「暮らしした」には「暮らした」という候補が示されるようにしておく。

6.4 「読む」ための辞書で調べられる語句の種類

「読む」ための辞書では、書かれた日本語に出てくる可能性があるあらゆる語句をさまざまな形で調べられるようにしておく必要がある。どんな語句を辞書に載せるかを検討する必要はない。どんな語句も載せるべきである。

これまでの辞書にあまり載っていないもので、特に重要なのは、次の(57)のような固有名詞である。固有名詞はインターネットの検索で調べられることが多いが、非母語話者にとっては、わからない語句が固有名詞かどうかの判断ができないことがあるからである。

(57) 固有名詞：「青森」(地名)、「優香」(人名)、「小枝」(チョコレート菓子の商品名)、「第三舞台」(劇団名)など

次の(58)から(61)のような語句も重要である。

(58) 複合語：「集合写真」、「若年層」など

(59) 略語：「確変」(パチンコで当たりの確率が上がる「確率変動」)、「ELT」(Every Little Thingという音楽ユニット)など

(60) 俗語：「まいうー」(うまい)、「ヲタ」(アニメなどに熱中している人である「オタク」を表すインターネット掲示板での俗表記語)など

(61) 専門用語：「無限ループ」(コンピュータでのいつまでも終わらない同じ処理の繰り返し)、「北極振動」(北半球の中緯度の寒暖に影響を与える北極圏の気圧の周期的な変動)など

さらに、マンガを読むためには、次の (62) や (63) のような語句が必要である。

(62) くださった話しことば: 「ったく」(まったく)、「わりい」(悪い) など

(63) オノマトペ: 「しーん」(静かな様子)、「ギク」(驚いた様子) など

また、メールやインターネットの掲示板などを読むためには (64) や (65) のような文字や記号が必要である。

(64) 顔文字: 「(ToT)」(泣く)、「m(_)m」(頭を下げる) など

(65) 記号: 「orz」(がっくり)、「w」(笑い) など

そのほか、古語や方言なども調べられると便利である。

インターネット上の辞書であれば、新語も簡単に増やしていける。逆に、ほとんど使われなくなった語句は、削除する必要はない。古い文章を読むときに役立つからである。

6.5 「読む」ための辞書で示される語句の意味

「読む」ための辞書では、調べた語句の意味が辞書使用者の母語や得意な言語で示される。その表示については、次の (66) から (69) のようなことを考慮する必要がある。

(66) 「読む」ために必要がない文法的な情報は載せない。

(67) 語句の意味の範囲がはっきりわかるようにする。

(68) 語句の評価的な意味がわかるようにする。

(69) 語句の背景情報がわかるようにする。

1つめの (66) は、たとえば、「～につれて」の前は「盛んになる」のような非過去形が使われ、「盛んになった」のような過去形は使われないという「読む」ために必要がない文法的な情報は載せないということである。文末にある「お腹が減った。」の主語は1人称であり、「お腹が減っている。」の主語は1人称の

ことも3人称のこともあるといった「読む」ために必要な文法情報は載せる。

2つめの (67) は、たとえば、「かもしれない」の意味を英語で「may」と示すだけでは「てもよい」の意味もあると思われる可能性があるため、そのような意味がないことを明示しておくということである。

3つめの (68) は、たとえば、「ゆっくり(と)」は高い評価にも低い評価にも使える中立的な語であるが、「のろのろ(と)」は低い評価を表す語であることを明示しておくということである。

4つめの (69) は、次のようなことである。たとえば「オランダ」という語について、この国がある場所や人口、面積、首都、産業などを示しても、あまり役に立たない。「日本が鎖国をしていた江戸時代にヨーロッパ諸国の中で日本が貿易を行っていた唯一の国」といった日本との関係を詳しく説明しておくことが必要である。日本語の文章は、そのような背景情報を前提にして書かれていることがあり、それを知らないとはよく理解できないことがあるからである。

これら (66) から (69) のほか、接続詞や助詞・助動詞のような機能語については、次の (70) のような情報も必要である。

(70) 機能語については、それが文章の中で果たす機能が示される。

たとえば、文頭にある「とは言え、」はその前の部分よりその後の部分のほうが筆者が言いたいことであるのが普通であるという情報である。「と考えるのは私だけだろうか」は反語であることが多いといった、長い単位が文章の中で果たす機能も重要である。

7 「書く」ための日本語学習用辞書の構想

7.1 「書く」ための辞書の基本的な構造

「書く」ための日本語学習用辞書は、書きたい内容を適切な日本語の文字にする「書く」コミュニケーション活動に役立つものにする必要がある。

辞書の使用者が日本語を書くときに知りたいのは、「あまり険しくない山を

歩く趣味」を日本語で何と書くか、待ち合わせに遅れそうなときに携帯電話から携帯電話にどんなメールを打てばよいかといったことである。

そうすると、「書く」ための日本語学習用辞書は、調べたい語句や書く「状況」を自分の母語や得意な言語で入力すると、それに対応する日本語の文字が示される形が基本になる。

辞書の使用者が日本語を書くときに何のために辞書を使うのかを考えると、「書く」ための辞書は、次の(71)から(74)のようなものにする必要がある。

- (71) 示される文字情報：さまざまな言語で語句を入力すると、それに対応する日本語の文字が手書き文字を含めて示される。
- (72) 示される意味的・文法的な情報：類義語との違いや、動詞や形容詞の活用のしかたなどが示される。
- (73) 示される文体的・社会的な情報：どんな文体の文章でどんな語句や表記が使われるかといった情報が示される。
- (74) 示される文章例：特定の機能をもった文の例や、特定の目的をもったメールや文書などの文章例が豊富に示される。

この(71)から(74)については、それぞれこのあとの7.2から7.5で、具体例をあげて詳しく説明する。

7.2 「書く」ための辞書で示される文字情報

「書く」ための辞書では、自分の母語や得意な言語で「経済学部」や「あなたの都合はよいですか」のような語句を入力すると、それに対応する日本語が豊富な例文とともに示されるのは当然である。

自分の母語や得意な言語で「うれしい」という意味の語句を入力すると、「うれしい」という意味をもつ顔文字・絵文字も示されるとよい。「メール 冒頭 社内」という意味の語句を入力すると、社内の人に送るメールの冒頭に使われる「お疲れ様です。」のような表現が示されるのも便利である。

パソコンなどの機器で辞書を調べたときに示される日本語の文字は、その機器でそのままコピーして使うこともあるが、別の機器で入力し直す場合もある。

ローマ字入力するために「OTUKARESAMADESU.」のような入力用ローマ字を示したり、携帯電話などで「かな入力」するために「おつかれさまです。」のような入力用ひらがなを示したりする必要がある。

また、手書きするときの漢字の字形も示す必要がある。「さ」や「入」のようにパソコンで示される字形と手書きの字形が違うものがあるからである。数字の「1」や「7」のように、言語や国・地域によって字形が違うものもあるので、ひらがな、カタカナ、漢字だけでなく、数字やアルファベット、記号なども含め、すべての文字について手書きの字形が必要である。

手書きの字形には個人差がある。そのため、「20歳前後の女性の大学生がプライベートな場面で書く字形」とか「中年男性のビジネスパーソンが仕事の場面で書く字形」など、さまざまな字形が示されるようになっているとよい。

くずして書いた字形も必要である。言語や国・地域によって、漢字のくずし方が違うため、日本語の漢字のくずし方と違うくずし方をすると、「書きなぐった、とても読みにくい文字」だと誤解される可能性があるからである。

7.3 「書く」ための辞書で示される意味的・文法的な情報

「書く」ための辞書では、それぞれの語句の意味的な情報や文法的な情報が示される必要がある。必要とされる情報は「話す」ための辞書と基本的に同じであるが、たとえば次の(75)から(78)のようなものである。

- (75) 語句の対応関係：母語などで入力した語句とそれに対応する日本語の関係が複雑なときでも、その対応関係がわかりやすく示される。
- (76) 類義語句との違い：意味が似ている類義語句との使い方の違いが示される。
- (77) 活用：動詞や形容詞の活用のしかたや、それぞれの語句の文法的な使い方についての情報が示される。
- (78) コロケーション：どんな語句と結びついて使われるかというコロケーション情報が示される。

1つめの(75)は、語句の対応関係の情報である。たとえば、英語で「wear」

と入力した場合、身につける対象によって「着る」「はく」「かぶる」「つける」など、違う日本語になることがわかりやすく示されるということである。

2つめの(76)は、類義語句との違いについての情報である。たとえば、メールの最初に自分の名前を書くとき、自分を知らない相手には「～と申します。」を使い、自分を知っている相手には「～です。」を使うという違いである。

3つめの(77)は、動詞や形容詞などのさまざまな活用形が示されたり、主語が3人称のときは文末で「思う。」は使えず「思っている。」にしなければならぬといった文法的な情報が示されたりするということである。

4つめの(78)は、たとえば「dictionary」と入力すると、「辞書」は「辞書を引く」「辞書を調べる」「辞書で調べる」のような結びつきで使われるというコロケーション情報が示されるということである。「辞書と相談する」という結びつきはないといった情報もあったほうがよいだろう。

野田(2007)でも指摘されているように、コロケーションには「辞書を引く」のような意味的なコロケーションのほか、文法的なコロケーションもある。たとえば、副詞的に使われる「従来」は「～ていた」や「～だった」と結びつくが、「～ている」や「～てきた」とは結びつかないといったことである。このような情報もできる限り示したほうがよい。「従来から」になると、「～ている」「～てきた」「～だった」と結びつくようになるといった情報も必要である。

7.4 「書く」ための辞書で示される文体的・社会的な情報

「書く」ための辞書でも、「話す」ための辞書と同じように、意味的な情報や文法的な情報のほかに、文体的な情報や社会的な情報が必要である。

このうち、文体的な情報というのは、次の(79)と(80)のようなものである。

(79) 文体による語句の違い：どんな文体の文章でどんな語句が使われるかという情報が示される。

(80) 文体による表記の違い：どんな文体の文章でどんな表記が使われるかという情報が示される。

1つめの(79)は、どんな文体のときにどの語句を使うのがよいかという情

報である。書きことばは、論文の文章のようなかたい文体から、親しい人によく携帯メールの文章のような話しことばに近い文体まで幅が広い。文体によって使われる語句も大きく違う。かたい文体では「以上のように」を使い、話しことばに近い文体では「こんなふうに」を使うというような情報である。

2つめの(80)は、どんな文体のときにどの表記を使うのがよいかという情報である。文体によって、「できる」と「出来る」のどちらを選ばよいか、「無理」と「ムリ」のどちらを選ばよいかといったことである。

表記の使い分けは絶対的なものではなく、相対的なものである。同じ文章の中で「とりあげる」と書きながら、一方で「但し」と書くのは、漢字とかなの使い分けに統一感がないと思われやすい。そのような統一感がわかるようにするためには、「親しい友達に軽い用件で携帯メールを送るとき」とか「やわらかめの文体で論文を書くとき」といった文体に分けて、それぞれの文体で頻度が高い表記を示すのがよいだろう。

一方、社会的な情報というのは、たとえば次の(81)や(82)のようなものである。

(81) 日本語ではあまり使わない表現：同じ状況でも、ある言語ではよく使われるが、日本語ではあまり使わない表現は、そのことを明示しておく。

(82) 日本語でよく使う表現：同じ状況でも、ある言語ではあまり使わないが、日本語ではよく使う表現は、その表現を明示しておく。

1つめの(81)は、次のようなことである。知らない人にメールで依頼などを行うときに、「まず自己紹介させていただきます」のような表現を使い、最初に詳しい自己紹介を行うのを好む言語や国・地域があるようである。日本語ではそのような表現はあまり使わず、用件に関係のない個人情報はいりませんと書かないことがわかるようにしておくといよい。

2つめの(82)は、たとえば、メールで依頼を行うとき「お手数ですが、」のような配慮表現をよく使うことがわかるようにしておくということである。

7.5 「書く」ための辞書で示される文章例

「書く」ための辞書で示されるのが単語レベルの日本語だけでは、それをもとにまとまった文章を書くのは難しい。次の(83)と(84)のように、単語より大きな単位の日本語を示す必要がある。

(83) 文例：「引用」「仮定」といった特定の機能をもった文の例が豊富に示される。

(84) 文章例：「誘い」「提案」といった特定の目的をもったメールや文書などの文章例が豊富に示される。

1つめの(83)は、自分の母語や得意な言語で、たとえば「論文 引用」と入力すると、論文中で引用を行うときの次の(85)から(87)のようなさまざまな文例が示されるということである。この場合は、それぞれの文例が使われる分野や、それぞれの文例に対応した参考文献の書き方などの説明も必要である。

(85) 山田(2010)では、この反応に男女差はないと指摘されている。

(86) この反応に男女差はない(山田, 2010)。

(87) この反応に男女差はない[12]。

2つめの(84)は、自分の母語や得意な言語で、たとえば「メール お詫び 納品 遅れ」と入力すると、納品が遅れるというお詫びのメールのさまざまな文章例が示されるということである。それぞれの文章例の使い分けなどの説明も必要である。

携帯メールの文例では、顔文字や絵文字が入り、改行のしかたなどもわかるメールの文章例が示されるようになっていて便利である。

なお、文例でも文章例でも、このような書き方はしないとか好ましくないという情報も示すべきである。たとえば、「25日でもよろしいですか」という問い合わせへの回答に「25日でもよろしいです」と書くと、偉そうな感じがする。「25日でも構いません」と書いたほうがよい。非母語話者が間違えやすいその

ような表現をできるだけ示したい。

8 日本語学習用辞書作成のための研究

コミュニケーションのための日本語学習用辞書を作るには、日本語学の枠組みではなく、非母語話者が辞書を使う状況を考えた独自の研究が必要である。

これまでのさまざまな辞書も、コーパスを活用して言語の実態を辞書に正確に反映させるような努力が行われてきた。しかし、動詞のコロケーション情報を辞書に載せるために、それぞれの動詞と結びつきやすい名詞をコーパスで調査するだけでは、非母語話者に役立つ辞書にはならない。大曾(2005)のように、非母語話者が迷いそうな表現をコーパスで調査する必要がある。

非母語話者の実際のコミュニケーション活動に役立つ辞書にするためには、次の(88)や(89)のようなことを具体的に解明する研究が必要である。

(88) 非母語話者はどんなときに何を辞書で調べたくなるのか。そのとき、辞書にどんな情報があれば役に立つのか。

(89) 非母語話者はどんなときに日本語を適切に使えなかったり適切に解釈できなかったりするのか。辞書にどんな情報があれば役に立つのか。

1つめの(88)は、たとえば、非母語話者に実際に読む必要がある文章を読んでもらい、どこがわからず、どんな語句を辞書で調べたくなったか、そのとき辞書にどんな情報があれば理解できたのかを詳しく調べるような研究である。

2つめの(89)は、たとえば、非母語話者の発話を分析し、どこで適切な発話ができなかったか、そのとき辞書にどんな情報があれば適切な発話ができただのかを詳しく調べるような研究である。

(88)についても(89)についても、「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの辞書を作るために、膨大な研究が必要である。そうした研究は日本語母語話者だけでは限界がある。潘(2006)のような非母語話者からの提言もあるが、まだわずかである。非母語話者に役立つ日本語学習用辞書を作るためには、母語話者と非母語話者が共同で研究することが不可欠である。

なお、この論文で述べた「書く」ための辞書は、インターネットの翻訳サイトや自動文書作成ソフト「直子の代筆」に似たものになると思われるかもしれない。しかし、それらは文章全体の翻訳結果などを示すだけである。この論文で述べた辞書は、文章を構成する個々の語句について学習できるものになる。

また、この論文で述べた「読む」ための辞書は、インターネットの翻訳サイトや日本語読解学習支援システム「リーディング チュウ太」に近いものになると思われるかもしれない。しかし、それらは日本語学習用ではない既存の辞書を使ったシステムである。この論文で述べた辞書は、非母語話者がどんな語句についてどんな情報を知りたいかを一つひとつ検討したものになる。

〈大阪府立大学〉

参考文献

- 井上優・有賀千佳子 (2006) 「これからの学習者用日本語辞書」『日本語学』25(8), pp.22-29.
- 大曾美恵子 (2005) 「コーパスによるコロケーションの特定—日本語学習辞書の充実を目指して」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 pp.11-23. ひつじ書房
- 砂川有里子 (1998) 「日本語学習者のための表現辞典」『日本語学』17(14), pp.45-53.
- 玉村文郎 (1995) 「外国人のための日本語辞書構想」『言語』24(6), pp.54-61.
- 野田尚史 (2007) 「文法的なコロケーションと意味的なコロケーション」『日本語学』26(12), pp.18-27.
- 野田尚史 (編) (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 潘鈞 (2006) 「中国人日本語学習者が求めている日本語辞書—日本語教育の視点から」倉島節尚 (編) 『日本語辞書学の構築』 pp.239-254. おうふう
- 姫野昌子 (2006) 「学習者のためのコロケーション辞典—『日本語表現活用辞典』の作成に際して」『日本語学』25(8), pp.40-50.

【調査資料】

- 『基礎日本語学習辞典 第二版』, 国際交流基金, Oxford University Press・凡人社, 2004.
- 『研究社日本語表現活用辞典』, 姫野昌子 (監修), 研究社, 2004.
- 「直子の代筆」(<http://www.teglet.co.jp/naoko/>)
- 『日本語基本動詞用法辞典』, 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (編), 大修館書店, 1989.
- 『日本語を学ぶ人の辞典—英語・中国語訳つき』, にほんごの会 (編), 新潮社, 1995.
- 「リーディング チュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp/>)